

## 〈資料⑥〉石童丸

(00:00) ナカシ (ナガシの手) 月にーむら雲ーオー 花にーかーアー せーエー  
(ナガシの手) 散りてー はかーなきー 世のなー かにー筑ーぜーんー

(27:34) 短いコトバの手)

コトハブシ

我れのー国もとーは九州 筑後ー筑前ー肥

後肥ー前

コトハブシ

なに 九州 九州でござるか 筑後筑前肥後肥前 おとこ

ろは 大隅薩摩で六箇国 なーに大隅薩摩で六箇国 つぎは 探題しゅうぎ

よおつかさどる 加藤左衛門重氏 なに 探題しゅうぎよおつかさどる加

藤左衛門重氏 驚きながらその顔色まで変わってくる重氏公 その次は

忘れがたみの石童丸 ウレイカカリ聞いて驚く重氏のなれの果ーて 筑後

筑前肥後肥前 大隅薩摩で六箇国探題しゅうぎよおつかさどる加藤左衛門

重氏までは書いたるが忘れがたみの石童丸と 聞いてびっくりー 持った

るー筆はぱったり落す おーいかなることか どおゆうことーか 我れに

も覚えもないが 家出をいたすその拙者があのと き めかけ胎内にはなな

月 宿りしみどり子があるとは思っていたが 男の子とは夢にも知らず

我れなきあとーに今生に生まれ ああーただ女の胎どおーに 我れは生み

つけたるばかりー 親とゆうところがどこにある なんの恩も 無情もな

いーこのー重氏ーをー 親と思ひ生みの父とー はるばるー 海山越えてー

たずねてー来たー石童丸 おおー そなたがたずぬる 父はー我れじゃ 加

藤左衛門重氏は 我れであるぞ 名乗ってしまおうと思おたが はっーと

氣をとり直し いや 十四年のこの間 弘法大師のご厚恩 忘れてはならん

この山の法令を破っては罪かるからず 十四年の 得度ーも無駄になる

そればかりではない 大師さまの ご厚恩 その忘れる 我れの罪はかるか

らず いやあ まわりめぐって 罰をこおむり どのよおに かんなん苦

勞をいたすとは言いながら 大師さまご恩 忘れてはならん それじゃと

ゆうて 名乗ったなら さぞー さぞ喜ぶだろお 知らぬとゆうて か 返

すわけにはゆかぬ ウレイ いかかはせんとー道心ー 両眼にははらはらー

思わずー見せるまいとは思えどーも 浮かんでせめずる玉ーなみーだ▽

(32:39)

コトハブシ

このよしを眺むるよりも石童丸

コトハブシ

おん僧さま 我れが

たずぬるお父上さまはあなたさまでござりましよ 父上さまであるならば

お名乗り下さりませ せがれであるか 父じゃとひと言だけー お名乗り

下さりませやあやお若いの 我れはまだまだ この世に 今生に生まれ

てな 妻とゆう これを定めた覚えもさらになし さても 男とゆうものが

ただいちにんで子どもが生まるるわけがござらん でも 父の でないと

申されますか ぜんぜんそおゆう者ではござらん いいえ たしかに父に

違いはござりません いや それがお若いのわけがある おん身の父上さ

まと 我れは弟子朋輩 しかしながらお父上さまは去年の秋のわずらいに  
この世に帰らぬ人となりました それを思えばお若いの いまだにおん身  
のお父上さまが いられたならさぞお喜びであろおと 思えば思わずこの  
身も涙が出ました いいえ あなたさまは父に違いはござりません 他人  
の人のお嘆きと あなたのお嘆きは きっーと なんぼ言われてもまさし  
く 我れの父上さまと存じます せがれであつたか石童と ひと言だけー  
いやいやお若いの さよおな者ではござらん ささ お墓からお父上さま  
がお待ちでござります お墓参りをなされませ しかれば父の み墓がこ  
のあたりに 少し参りますとお墓がござります はやく あないをいたし  
ますお越しなされ さよおでござりまするか しかれば どおぞお願い  
たします ここおいでよとまた石童の手を引いて 墓所をさして急いでゆ  
く 七八軒 手前まで来て あれご覧なされ あの 石碑をござらん あれが  
おん身のお父上のお墓 はやくお参り下され さよおでござりますかと  
石童夢にも知らずに 指さされた墓所をさして急いでゆく あとに残つた  
苜蓿は じつとうしろ姿をながめているところ 墓の前になればひざまず  
き香花たてまつり 南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏 申し父上さま ただ今こ  
れに参りしは 筑後筑前肥後肥前大隅薩摩で六箇国探題しゅうぎょおつか  
さどる 加藤左衛門重氏の 忘れがたみのせがれ 石童丸と申します たず  
ねたずねてこのみ山に ご壮健のよしと聞くより喜んでたずねて来てみれ  
ば お変わり果てたるおん姿 こればかりではござりません お父上さま  
国もとに残っている姉上から 頼まれことずかつた品がござります これ  
は墨の衣香の袈裟 姉は そなたがたずねてゆくならば 我れの思い ひと  
品こしらえて頼むから 必ず父上に とどけてくれと預かつたる袈裟衣を  
一生のうちに間に合わん **ウレイカカリ** 死んでもーおん身のお心は 必ず  
変わりはござるまい この世で間に合わぬ姉のー真実 二日ふた夜さも  
ひと目眠らずに仕立て上げたる袈裟と衣ー 一生の体に間に合わぬ石碑に  
なりと着せ申そおー 立ち上がった風呂敷包みー 腰ーから解きはなしー  
石碑の前に広げ さてもふりほどいてーほとけと石に着せかくるー 不  
思議なるかな風も吹かずー **ノリカカリ** 着せたるー衣ーに香の袈裟ー **ヲ**  
**虚空** はるーかーにキリリ キリーリーと舞い上がってゆく(短いノリ  
オトシ)▽

かに聞こえてみれば あーねが 二日ふた夜さ 眠りもせずになたが高野にたずねていくなら 我れの心ばかりの眞実 預かってきたことずかりものこの世で 間に合わぬか 石碑になりとも立ち上がったあの袈裟と衣ただ 二つや三つになるやならんで 捨てて来たる娘 ウレイ見事に成長いたして袈裟と衣 仕立てるほどもなってくれたー まだこの子もー胎どおに宿っているー 女やら男やら知らざるうちに なんにもわからぬつま子をふり捨てー 家出をいたしたる重氏をー 親とー 思いー はるばるー 海山こえてたずねてくる 名乗ーってしまおーかー いやそりゃならんそりゃあならんー 大師さまのご恩大事であーるとー じっと見ているうちに なに思ひしか虚空に舞い上がった袈裟と衣 ノリカカリ またも キリキリー 舞いー下るー 苧萱僧の (41:02) ノリ そばーにーとー 舞い下ーる 苧萱 道ー心にー 袈ー装ーとこーろーもーはしがみつくー (短いノリオトシ)▽

(41:42) ノリカカリ はっと眺めて驚くー 石童 あーこはいかにと石碑 じっとめがきを見てやれば大和の往生 無縁の墓と記してある 見るより驚く石童丸 コトバ なに 大和の国の往生 無縁の墓 無縁は法名であるからいきしょおの名前ではない しかしながら ンー 我れの父ならーなんで大和の国とめがきがあるはずはあるまい 我れの父なら九州筑前と書くはずだ なーによりし わかった さても苧萱僧の そばにとんでゆく おん僧さま あなたは父上さま 必ず父である重氏公のなれの果て おん僧さま せがれであるかとひと言だけ 聞かせて下さりませお名乗りあいやお若いのお若いのしばらく しばらく手をおはなし 我れはそおゆうことではござらん あくまでもそおゆう者ではないと申されますか そおでござるぞお若いの 我れは 最前申したとおり 妻を定めたこともさらになし しかしながらお父上 言いたいがないとあらば返事がないから言うには言われぬ おん僧 よっくーご覧なさい人をだますもほどがある これは我れの父の墓ではござらぬ いーやおん身のお父上の墓 しかれば我れの父はどおして大和の国にお越しになったか この墓ーのめがきを見てやれば大和の国の往生 無縁の墓と記してある 無縁というのは法名でござるおしかしながらおん僧さま 我れの父ならば 九州筑前とめがきがあるはずそれに 大和の国とはなにごと ノリカカリ 我れをたばかってだまし ここをひと逃れ逃れよおとゆう おん僧さま 出ー家に似合わぬそのたばか

りごと 何事なさるか いかにも我れが年をとらない 子どもじゃから  
と思おて侮って おん身の口にはんしょうないとは言いながらおん僧さま  
言い放題に申してわたくしを いづくへなりと追い返そおと思われるか  
やあーなんぼいやと言われても知らぬと言われても おん僧 この上から  
はーあくまでも名乗らせてやるー 父であるせがれであるといと一言  
申し聞かせておくれーおん僧ー(ノリの手) **ノリ** しかと抱きすがーるー  
はっと驚くーかーる萱 **ノリ** **コトバ** あいや おー若いのお 若いのおおゆる  
う者ではござらん なんーで包み隠しをいたすものか あいやお若いの  
えーなんぼいやそお知らぬとゆうものかつべこべつべこべ申しあそばして  
も おん僧さま 子どもの意向で名乗らせてやる(ノリの合の手)そおゆる  
う者ではないと石童 萱萱の争い話は変わって下手からー 若い衆ー二に  
んの者ー 息ーせき切って駆け登ってくるー(ノリオトシ)▽

(45:37) **ノリ** **カカリ** やあーやあ 誰かと思えば九州のお若い人 どーこにいられる  
かと思つてたずねたずねて登つて来たー やあー よおやく出おたこれ  
で安心だ しかしながらお若いの 母上さまのお待ちかね **コトバ** さても  
にや 三じつといとま 五じつたつても帰らぬ それを思い 案じられてそ  
れがもととなつてもー 今か 今かとゆうよおな大病 **ノリ** **カカリ** はやく  
おー帰りあそばしませ 母上さまにご安心させておくれー 悪くなつて一  
大事ー 背に負おて行こお さーてもいちにんの奴が背中をさしい出すいー  
いちにんの 奴がー おぞー 負ーわれておくれとー 二にんでもつてー石  
童背に負い かむろが宿とーまーっしぐらに駆け下ーるー(短いノリオト  
シ)▽

(47:08) **ノリ** **カカリ** はつとうしろに残ーりーしー重氏ー 萱萱ーうしろ姿を見送  
り **コトバ** すまん すまん せがれ 石童ー丸 許してくれよー(ウレイの  
手) **ウレイ** **カカリ** 汝が疑うもー無理はない 我れがー九州筑後筑前肥後  
肥前大隅薩摩で名乗るー 重氏のーなれの果ーてー 汝が言うとおりの左  
の眉毛にはほくろがある それを目印に 千里が 証拠はそこじやと言つ  
たに違いはなかるお おー 許してくれ これも **ウレイ** 弘法大師のご恩  
思い 汝親子を恨んで名乗らんことではないー 大恩人はー大師さま そ  
のご恩ーにたいして名乗られずー 許しておくれ 手を合わーせて萱萱僧ー  
我が子うしろ姿にー 伏しー 拜んでー泣きーなみーだー さすがに猛き  
重氏公ー たとえ出家得度はいたしても 生身のー 人ーげん 思いにも思

いーかね おお この上からは めかけ千里のいまはの際 死に顔なりと見てやるおと **ノリカカリ**あとを慕おてかぶるが宿 一生懸命ー急いでくだりくる(短いノリオトシ)▽

(49:30) **ゴトバ**石童丸は母の居間に **ウレイカカリ**よおよおー 上がり母上さま母とーとりすがり 呼べどもー叫べどもー母の千里ー この世を去りてーうわ息ばかーりーなんの言葉もさらになしー あとを慕おて苜萱来て 様子を眺むれば なに もお無情の風もおだれたか じゃあこおゆうことになつたら 人に見られぬうちに 石童に知られぬうちに 急いでまた高野の山と登りーゆく **ウレイ**呼んでもー叫んでもかいなきー母 こーなれば仕方が無いー宿屋のあるじをはじめとしー 隣近所集まって 野辺の送りをいたしー そこに四十一九日ーのあいだ

(50:39) **ゴトバ**(コトバの手) 母のー菩提 供養いたしー四十九日がたつならーば 九州ー筑前 さしてー帰りゆくー 石童ー丸 かえってみればーわがふるさと あてにーならぬー人間ー 寿命情けーない 杖よ 柱とー頼りにー思うー姉もーこの世をー去り 頼りに思うー人ぞーさらにーなしー石童ー丸は こころーばかりの 供養をいたしてーまた 尋ねて登りゆくー 高野のー山ー

(51:41) **キリブン**(短いノリの手) **ゴトバ**苜萱ー僧をたずねて参り 親といわずに子とー名乗らずー さてもー苜萱ー道心のー 出家弟子とーなつてー得度ー いたすー親子の人びと さても石童丸が一人前 よおやくー出家になるその頃ーには 重氏公もその世を去る **ノリカカリ**去るいまわの際に 初めてー我が名を名乗り 聞かせてーそののちー 石童ー丸とそれほどまでも 子といわず親とー名乗らずに 得度修行いたしたその功力かー人びとさまがー 弘法大師高野の山(短いノリの手) 無明の橋にいささか離れ 親子ー地藏と祭られるー石童丸のなれの果てー筑後ー 筑前肥後肥前 大隅薩摩で六箇国探題しゅうぎよおつかさどるー加藤 左衛門重氏 **小オクリ**親子地藏のものーがたーりー 石童 丸ーまず これーまでー

(53:28)